



2016 年 (平成 28 年)
7 月号 (No. 854)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

平成28年度通常総会開催 準会員制度の導入を承認、入会のハードル を低くし会員増を図る

平成28年度通常総会が6月25日午後2時から東京・市谷八幡町のTKP市ヶ谷ビルで開かれた。会員143人が出席し、①平成27年度事業報告②平成27年度決算報告③定款・定款施行細則改正について審議した結果、いずれも原案どおり可決承認された。この総会では、厳しい財政状況が改めて報告され、会員を増やすために準会員制度を導入することが提案された。

■小林会長挨拶 定款を変更し、 会員増強の仕組みをつくる

冒頭、小林政志会長は次のように挨拶した。「財政状態が厳しいことは、すでにご承知いただいているとおりで。再生委員会を立ち上げた。もはや検討の段階ではなく、できることを実施しなければならぬ。一番重要なことは、当

面の財政の改善も、もちろん大事だが、それだけでなく将来的に財政の基盤を安定させること、それには会員増強の仕組みをつくることだ。本日は、定款・定款施行細則の改正という形でお諮りしたい。しっかり活動していくために制度を見直す重要な会議だ。」

■事業報告・決算報告

目 次

平成28年度通常総会開催 準会員制度の導入を承認、入会の ハードルを低くし会員増を図る……	1
第70回ウェストン祭開催さる…	5
徳本峠越えとウェストン祭に参加して…	7
支部長が変わりました……	8
創立110周年記念学術調査隊…	10
「山の日に向けて」山を考える②…	11
追悼 厳しかった川上監督を偲ぶ…	12
図書紹介……	13
新入会員……	14
会務報告……	15
会員異動……	16
ルーム日誌……	16
INFORMATION ……	17
W・ウェストンが残した日記を全訳出版へ…	17
編集後記……	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……10～20時
水・金……13～20時
第2、第4土曜日……閉室
第1、第3、第5土曜日……10～18時

この日の総会には1826人から委任状が提出された。また、1455人が議決権を行使された。出席した143人を合わせ3430人となった。在籍者5021人の過半数を上回って総会は有効に成立、議案審議を開始した。佐藤守総務担当常務理事が27年度事業報告を、吉川正幸財務担当副会長が同決算報告を説明した。

年度末会員数は5020人に

〔事業報告〕登山振興事業は、YOUTH CLUBが雪山天気予報などを実施、積極的に活動。海外登山助成制度によって、日本大学山岳部ザンスカール登山隊、同志社大学極西ネパール登山隊など6隊に助成した。28年8月11日の「山の日」発足を控え、準備作業を行なった。一般登山者を対象とす

る登山教室はYOUTH CLUB、また全国33支部のうち15支部で行なわれている。

山岳環境保全事業としての森づくり活動は「高尾の森づくり」のほか11支部で実施中。110周年記念事業としては学生部男子隊などの海外登山、「ヒマラヤの東山岳地図帳」、英文「ジャパニーズ・アルパイン・ニュース」(JAN)記念号の発行など。ネパール大地震に対し国内山岳6団体が救援募金を実施、寄付総額は2800万円に達した。

会員動向について報告があった。これによると、27年度は237人が入会したが、253人が退会した。年度末会員数は5020人で前年比16人減。依然として減少が続いている。永年会員は22人増加

し369人となった。全会員の7・4%と最高記録を更新。

経常収支は639万円の赤字

〔収支決算〕 110周年を迎え、様々な記念事業を行なったほか、山岳6団体によるネパール地震救援募金の窓口になったことなどによって、収益・事業費とも大幅に増え、いずれも過去最大となった。経常収益は前年度比28・4%増の1億3147万円、経常費用は同46・5%の1億5324万円。

入会金、会費収入は、ともに減少に転じた。入会金は437万円で前年度比47万円、9・7%の減少。会費収入は5216万円で同96万円、1・8%減。経常費用は、『山岳』『山』など出版事業が1304万円と247万円の減少となったが、これは『JAN』の発行を110周年記念事業として行なったため。YOUTH CLUBは経費削減に努め185万円、42・4%減となった。支部事業費は、本部から各支部に交付される運営交付金・支部事業助成金のほか新入会員獲得奨励金、特別事業助成金を含み2155万円、4・8%減。上高地山研事業費は、原価償却費等を含み892万円。建物の経年劣



開会に先立ち挨拶する小林政志会長

化による修繕費用が増加傾向にある。上水道工事の支出は固定資産として計上。

経常収益から経常費用を差し引いた収支(当期経常増減額)は、2592万円の赤字となった。前年度と比較するため、110周年記念事業を計上外損益として計算し直すと、経常収益は1億2305万円、経常費用は1億2944万円で、639万円の赤字。前年度の623万円の赤字とほぼ同じ。赤字幅が資金流失のない減価償却費・引当金計上額とほぼ均衡しているため、資金不足に陥らない状態を保っている。

平井拓雄監事からの監査報告があった。収支計算書等が正確かつ妥当であり、理事の業務執行が誠実に行なわれたことを認める、と報告した。質疑応答の後、採決を求めた。大きな拍手で承認した。

■準会員制度の導入など

〔定款・定款施行細則の改正〕

続いて定款・定款施行細則の改正について審議した。具体的には準会員制度の導入のほか、入会手続きの迅速化、終身会員受け入れの一時停止、年会費減額の範囲拡大などが提案された。

▽**準会員制度の新設** 名称を「準会員」とする。3年以内に通常会員に移行しなければならぬ。移行しない場合は原則として除籍する。入会金は5000円(26歳未満は免除)、年会費は6000円。入会にあたっては会員1名の紹介者を要し、会長が承認する。会員総会での議決権はなく、役員には就任できない。会員特典は原則として通常会員と同じだが、『山岳』は配布しない――など。

▽**終身会員受け入れ一時停止** 入会後10年以上在籍した場合、一定の終身会費を前納すれば終身会員とし、以降の年会費が免除されるが、今の金融情勢では運用益を見込めず、当面受け入れを停止する。

▽**家族会員の会費減額** 同居の親族がともに通常会員の場合、申し出により会員1名を除くほかの会員の年会費を減額、8000円とする。夫婦会員だけだったが、子

ども・孫などにも範囲を拡大。

▽**入会手続きの迅速化** 入会には会員2名の紹介を得て申請、理事会の承認を必要としてきたが、月1回開催の理事会では迅速な処理が難しく、会長の承認で認める。

これらは、いずれも定款・定款施行細目の改正を伴うもの。定款の変更は会員数3分の2以上の賛成が必要となる。挙手でもって採決した。賛成は議決権行使、委任を含め3389、67・4%となり、辛うじて3分の2を上回った。

■報告事項

〔28年度事業計画・予算案〕

28年度事業計画・予算案は3月の理事会で承認し、内閣府に提出している。その内容を報告した。

公益目的事業として登山振興事業、山岳研究調査事業、山岳環境保全事業を実施する。具体的には、秩父宮記念山岳賞、海外登山隊への助成、機関誌『山岳』など。登山講習会などのYOUTH CLUB事業に注力。また、全国で展開している森づくり事業を推進し、『山の日』を記念した事業を開催。会費収入は、平成14年の6800万円をピークに26年度には5300万円と1500万円の減少と

なっており、通常業務の維持が困難になりつつある。若手会員入会者が増え、会員減少に歯止めがかかってきたが、会員の高齢化で会費免除の永年会員が増加、財政状態は悪化している。再生委員会では会員増強策と会員制度の検討を進めてきた。一部の支部で取り組んでいる登山教室・会友制度が、会員増加に有効な方策であることが実証されており、これらを視野に入れ検討を進める。

経常収支はここ数年、赤字を計上しているが、28年度に赤字を半減、さらに29年度には黒字化を目指す。会費収入は5210万円、事業収益は1520万円、受取寄付金・助成金等として2436万円を見込んだ。会費収入は前年度予算よりも減額しているが、会費納入者の減少、準会員制度導入による一時的な収入減を見込んだ。

経常費用は、『山岳』、『山』などの出版事業に1240万円(前年度比210万円減)、支部事業費に1777万円(同378万円減)、上高地山岳研究所の維持費891万円などを計上した。『JAN』をネット化、支部事業は支部独自の周年記念事業が一段落した。総額

で1億374万円(同3052万円減)となった。

会費滞納除籍対象者名簿が配布された。2年続けて滞納しており、あと1年滞納すれば除籍となる。対象者は64名。

【新支部長紹介】

新しい支部長が紹介された。岩手は阿部陽子氏(11181)、神奈川は込田伸夫氏(9546)、東海は高橋玲司氏(12955)、関西は金井良碩氏(6988)、福岡は高木莊輔氏(12920)、北九州は関口興洋氏(13643)。

■質疑・応答

長田義則会員(5465) 入会する際に必要な理事会の承認を改め、会長承認に変更するのは、従来どおりでいい。会長1人で承認するのか。終身会員という制度を存続させながら、受け入れを停止するのはおかしい。

佐藤常務理事

入会の手続きを月1回の理事会で行なうのでは、手続きの迅速化が図れない。

小林会長

すでに会員2人の推薦をいただいている。審査は済んでいるので、簡素化したい。

吉川副会長 終身会員は入会後、一定の会費を前払いすれば、その

運用益を見込んで会費を割り引く制度だが、マイナス金利の時代に運用益を見込むのは困難であり、停止することにした。「永年会員」の会費免除について、その是非を議論しているのだが、「終身会員」は「永年会員」を前提としており、さらに時間をかけて検討したい。

長田会員

入会申込書を送付したが、本部役員の紹介者がなかったのが、却下された。調べてみると、1960年6月に本部役員が必要に変わったそう。どんな背景があったのか。面識のない役員が紹介者というのはおかしいものだ。会長にまかせるのではなく、理事会できちんとやってほしい。



122名が参加した総会会場の様子

神崎忠男会員(6002) かつて理事を担当していたころ、推薦者の中に本部役員のない申請があった。理事会の皆が推薦者をよく知っていたので、認めたことがある。110年の歴史と伝統にふさわしい制度にすればいい。推薦者の責任は、もつとはつきりした方がいい。永年会員から会費を取るという噂が流れている。理事会が最終責任を取るからといって、どんなやつっている。総会などの場を利用して意見を聞いて欲しい。

高橋聡会員(5832) 会員の50%以上が70歳以上である。会の運営に高齢者の意見が反映されていないのではないのか。定款施行細目第9条2に「理事は、選任時において満70歳を超えないものとする」という規定がある。年齢制限をなくして欲しい。役員選任方法についても考え直してほしい。

有元利通会員(9703) 準会員として、どのくらい会員が増えるのか。見積もりはあるのか。

橋本清会員(6066) 準会員をどのくらい増やすのか、きちんと見積めて実施して欲しい。会員の承認は理事会で行ない、急ぐときは便宜上会長が承認するというよ

うに運営できないのか。

小林会長 赤字対策ではない。あくまで会員を増やして会の基盤を強くしたいということだ。基盤を安定させることによって、入ってきた人の居場所があつて、活躍してもらい、会から教わったことを次の人に回っていくようにしたい。その仕組みをつくるのが大切だ。居場所がないと辞めてしまうだろう。YOUTH CLUBとか支部活性化で基盤を安定させたい。

大島輝夫会長 (4012) 会報「山」5月号に、「会員名簿は個人情報保護の観点から発行できない」とのお知らせが掲載された。私の関係する会では、個々の会員に掲載してもよい情報、たとえば氏名出身大学、学部、住所などを聞いて了解を得て制作している。内容については個人の選択に任せている。工夫できないか。また、ルームの開館日だが、月曜日を休館にし、土日に開くようにして欲しい。

富澤克禮会員 (12425) 支部規約には、準会員制度の規定がない。本部で作っても、支部で受け入れられるには、支部規約を改正しなければならぬ。通常総会を開いたばかりで、臨時総会を開くのでな

ければ、1年後となる。

吉川副会長 会員を増やすが目的。準備ができ次第、承認したい。

佐藤常務理事 9月に予定している支部合同会議で相談したい。

副島一義会員 (13339) 準会員を経て正会員になるときは、改めて入会手続きが必要なのか。会員2人の紹介もいるのか。

小林会長 そのとおりだ。

大森弘一郎会員 (4532) 除籍対象者名簿が配布された。配布する前に、残ってもらうよう努力したか。紹介者に連絡すべきだ。

瀬沼信一会員 (15386) 新入会員たちは会員名簿を欲しがっている。プライバシーを保護しなければならないというが、「除籍対象者名簿」だつて立派な個人情報だ。「会員名簿」ができないことはない。その際、年齢別の名簿は作れないか。年配者の意見が多く、若い会員がついていけない。

小笠原辰夫会員 (13760) 「山の日」の意義を国民に広く説明して欲しい。テレビなどマスメディアを通じてアピールすることをお願いしたい。

高砂寿一会員 (15326) 会員外の人々を対象に、広く寄付を呼

び掛けて欲しい。ナショナル・トラストやボイスカウトなどを参考に、山登りを普及させていきたい。

西谷隆巨会員 (14804) 記念

『山岳』第百十一年(2016年)発刊のご案内

『山岳』第百十一年号は、9月中旬に刊行の予定です。内容をご紹介します。

〈第百十一年号目次〉

「特別寄稿」

「山の日」に向けて、特別に原稿が掲載されます。

「読物」

*「山の日」成立までの軌跡(成川隆顕) 「山の日」が誕生するまでの7年間の軌跡を、日本山岳会を中心に成川会員が報告。

*私たちにとってマナスルとは(江本嘉伸) 今年は初登頂60周年。マナスル登山の意味を今日的視点に立つて再検証します。

*富士山vsマッターホルン(マーティン・フッド) 英文版『日本百名山』の著者による日本山岳会における講演を再録します。

*大学探検部60年の軌跡(岡村隆) 「探検部員たちは何を指してきたのか」その踏み跡を検証。

*自著を語る(中村保、沖允人) 『ヒマラヤの東 山岳地図帳』

植樹を行なう計画はないのか。後に残る有意義なものと思う。
山田和人副会長 森づくりをしている支部と相談していきたい。(高橋重之)

と『インド・ヒマラヤ』の著者・編者が自著への想いを綴ります。

「記録」

*西ネパールの未踏峰・アイチェン峰初登頂(同志社大学山岳部)

*東ネパール・ジャネⅡ峰全員初登頂(日本山岳会学生会部ネパール東部登山隊2015)

*アピ南面から北面に転進、初登ルートに登頂(日本アピ遠征隊2015)

*念唐唐古拉西山群・ハダリ峰試登、タリ峰初登頂(神戸大学・中国地質大学合同登山隊)

「調査・研究」

*山名考——黒部源流域の別称をめぐって(五十嶋一晃) 別称表記の山が日本一多い黒部源流域の山名の謎を解き明かす。

*原発事故による阿武隈山地の放射線量(柴崎徹) 昨年の宮城県での調査に続く福島県における放射能汚染の実態を報告。

以下は例年どおりの構成です。
(『山岳』編集委員会)

REPORT

第70回ウエストン祭開催さる

日本山岳会信濃支部

平成28年6月5日(日)、今年も

ウエストン祭(本会主催・信濃支部主幹)が上高地で開催された。ウエストン祭は、昭和22年6月のウエストン碑の復旧を機に始まり、今年で70回を数える。国民の祝日として「山の日」が制定され、今年は第1回の記念大会が上高地で開かれるが、70回の節目を迎えたウエストン祭が、その関連行事として行なわれることに、何か深い縁を感じる。

祭の開催にあたっては、信濃支部の実行委員会を中心に、松本市をはじめとする協賛団体や関係機関、地元町会などとの連絡調整、記念山行の下見などの準備が重ねられた。心配された天候も幸い好天に恵まれ、「山の日」とのタイアップもあって、大勢の皆さんに参加していただいた。70回の節目にふさわしい盛り上がりを見せたウエストン祭が、日本山岳会だけでなく、山を愛する多くの人に支えられていることを改めて実感した。

◆記念山行・徳本峠越え

6月4日(土)午前6時、島々公民館で出発式。例年同様、島々町会のご協力により湯茶、漬物などの接待が行なわれた。参加者は日本山岳会会員のほか、一般の登山者、松本市や山の日記念大会推進室、環境省など関係機関の職員、地元安曇小学校の児童父兄ら総勢300名。出発式では塚原賢勝・信濃支部長の挨拶、山行リーダーからの注意事項の後、ストレッチで体をほぐし出発。腕章を着けた信濃支部員が、先頭とアンカーを務



霞沢岳をバックに子どもたちの歌声が響き渡る

めたほか、医師である会員も救護班として同行した。

徳本峠への登路となる島々谷川は、雪が少なかつたものの土砂崩落などで荒れていたが、(財)自然公園財団などにより橋の架け替えや整備が行なわれ、かつ当日は、廃業した岩魚留小屋に仮設のトイレを設置するなど全面的な協力をいただいた。また、徳本峠小屋では豚汁が振る舞われ、参加者に活力を蘇らせてくれた。例年なら雪溪の下りとなる黒沢も雪がなく、夏道を下り明神へ。おおむね4時ごろまでには全員が無事下山し、記念山行を終えた。

◆碑前祭

6月5日(日)午前10時、ウエストン碑前広場。進行は信濃支部・古幡開太郎会員。

《第1部 式典の部》

- *開会の挨拶 日本山岳会信濃支部・塚原賢勝支部長
- *献花 安曇小学校の児童2名
- *献歌 「ウエストンの歌」安曇小学校4・5・6年児童
- *黙祷
- *詩の朗読 尾崎喜八「ウエストン祭に」渡邊庸子会員
- *主催者挨拶 日本山岳会・小林



講演される平林克敏・元副会長

政治会長

- *来賓 松本市長、環境省松本自然環境事務所、(財)自然公園財団上高地支部、農水省中信管理局、国交省北陸地方整備局松本砂防事務所、上高地町会長、上高地観光旅館組合長、北アルプス山小屋友好会会長、松本市安曇小学校校長、長野県山岳協会会長。以上を代表して松本市山岳観光課・加藤市朗課長(松本市長が同日、長野県内で開催された全国植樹祭出席のため)から祝辞
- *合唱 曲目「エーデルワイス」リコーダー演奏は安曇小学校児童、「おお牧場はみどり」安曇小学校児童とエーデルワイス・クラブ

《第2部 記念行事》

- *記念山行報告 徳本峠山行リダー 信濃支部・東英樹会員

*記念講演

「ウェストンが歩いた頃の山登り」

平林克敏・元副会長

ウェストン師が来日した1888年ごろ、ヨーロッパでは「ブレイ・グラウンド」という考えが、若者たちの山登りの中にあつた。それは「遊歩道」と訳されているが、「山河跋涉」という方がふさわしい。それは、若者たちが深山幽谷に分け入り、高い山に登って昂然の氣を養い、プライドの高いすばらしい人間になる、ということだった。こうした考えを日本に持ち帰った新島襄の教えを受けた浦口文治は、ウェストンの旅に同行し、ウェストンの繊細な描写力、温かい人柄、観察眼の鋭さを間近にし、日本人との共通性を感じていた。日本人は豊かな自然によって育まれた感性で、自然を深く知り、山に対する畏敬の念、尊敬を抱いている。山河を跋涉し、深山幽谷に分け入り、頂上に登るという行為は、近代登山が発達する以前から行なわれていて、そうしたことが、日本の文化の礎となっている。そうしたことを改めて見直すことが、「山の日」の意義ではないかと考える。

(要約)



「ウェストン祭70年のあゆみ展」の会場

*全員合唱 曲目「今日の日はさ

ようなら」エーデルワイス・クラブ先導

*閉会 午前11時30分

午餐会 (上高地温泉ホテル) 式典に参加された多くの来賓とともに、恒例のカレーライスでの午餐会を開催。出席者は来賓各位のほか信濃支部会員、他支部会員など総勢90名で、にぎやかに懇談した。

◆ウェストン祭70年のあゆみ展

*期間 平成28年5月28日(土)～6月12日(日)

*会場 環境省上高地インフォメーション・センター2階展望休憩所

*開催の趣旨

ウェストン祭は、「日本の近代



戦後すぐのウェストン碑の復旧式。最前列は横有恒さん(右)と松方三郎さん(左)

登山の父」とされ、日本アルプスを母国イギリスに紹介したW・ウェストンの功績を偲び、併せて登山振興や山岳環境保全に資するものとして開催されてきた。その起源は、昭和22年6月、戦火を逃れていたウェストン碑が修復され、再び梓川畔の現在地に取り付けられた復旧式に遡り、以来70年、欠かすことなく続けられてきた。

今回、ウェストン祭が70回の節目を迎えるにあたり、その足跡をたどり、この祭の意義を再確認する意味から、関係する資料を一般に公開した。また、本展については、第70回ウェストン祭と同様、第1回「山の日」記念全国大会の関連行事として位置付けた。

*展示資料

①ウェストン祭の歴史、ウェストン碑にまつわるエピソード、記念山行・徳本峠の紹介、記念講演(歴代講演者と昨年の故・谷口けい氏の講演内容)、ウェストン祭の今昔などの写真パネル35点。なかには昭和17年12月、戦禍を避けるために秘密裡にレリーフが取り外されたときの写真など、極めて貴重なものがあつた。

②記念手拭や原画、ポスターなど14点。金光義朗氏や三代澤本寿氏、佐藤久一朗氏デザインのもの。

③手拭とセットにした、高山に生きる動植物をモチーフにした歴代の記念バッジ。

④ウェストン碑の設置や復旧式で中心的な役割を果たした日本山岳会第4代会長で、初代信濃支部長を務めた横有恒氏の関連資料など。

なお、本展示に際しては、インフォメーション・センターを管理する環境省上高地自然保護官事務所と(財)自然公園財団上高地支部から多大なご協力を賜ったことに心から感謝したい。

(米倉逸生)

REPORT

徳本峠越えとウエストン祭に参加して

山内優祐

川沿いを進み、峠を越えて上高地へ至る。「登山」というよりも「跋涉」という言葉がしっくりとくる山行であった。

その日は、午前零時に調布駅で森前会長と大槻理事と合流し、安井山研運営委員長の運転で安曇野へ向けて出発した。今どきの軟弱な大学生顔負けのハードな旅程であったが、好きなことをするためには、苦も苦にならないのだろう。途中、休憩を取りながら午前5時ごろ、島々公民館に到着した。

車中泊で硬くなった身体を準備運動でほぐし、午前6時ごろ出発した。スタッフを含めて峠越えのメンバーは19名、うち東海支部から8名の参加であった。初めての山道を、初めて会う人たちと歩く「山」という共通の話題は尽きないが、多少の沈黙も苦ではない。団体で山の楽しさを共有しつつも、各々の山歩きに耽ることができ、自立した山遊人が集まっていたからであろう。平坦で涼やかな川沿いを進む。待っても待っても、険

しい道はやってこない。こういうときに唄を歌いたくなるんだろうな、と思いつつも黙々と歩いた。途中、岩魚留で昼食を摂る。まだ11時前であった。

いよいよ登りに入る。雪はなく登りやすいが、息が切れる。ふと顔を上げると、スタートから先頭集団をキープしている東海支部のお母さん方は、談笑しながらスイスイと登っていた。焦る気持ちを抑えながら、一步一步進む。

黒い鋭利な山の先端が見えた。すごい、これが北アルプスか。13時10分、徳本峠に到着した。感動もそこそこに、まずは小屋で振る舞われていた豚汁をいただく。山より団子である。衝動買いしたコーラを飲みながら、まじまじと山を眺める。登りたい。苦勞して出会えた山だから、大事に登ろうと思えるのだろう。効率的な個人登山に虚しさを感じる方、登り尽くした感のあるベテランの方には、ぜひ徳本峠越えに参加して欲しい。

気の緩みに気を付けながら坂を

下る。15時15分、明神池に到着した。総行程9時間の山行であった。これは例年にならないハイペースであったようで、パーティの脚力が比較的にそろっていたこと、雪がほとんどなく歩きやすかったことが要因ではないか、とのことであった。山研での夕飯は、キムチ鍋と豆乳鍋、東海支部のお母さん方が収穫・持参された山菜の和え物と、松本さん自家製玉ねぎのサラダ、ちらし寿司など盛りだくさんであった。これらは、ひと足早く到着していた方々や管理人さんが用意してくださったものである。おもてなしには頭が上がりません。宴会は盛り上がった。途中、小林会長も顔を出された。疲れがあ



長い道の間を経て徳本峠に到着した一行

る分、お酒も良く回ったのだろう。様々な年代や地域の方々が「山」という共通項でつながっていた。これが日本山岳会の良さなのだろうと思いつつ、ひと足先に布団へ向かう。翌朝は、昨晚の盛り上がりにもかかわらず全員時間どおりに起床し、準備をテキパキとこなしていた。さすが山の人である。

途中、バス停に併設されているインフォメーション・センターに立ち寄り、ウエストン祭の歴史を学んだのち、ウエストン祭の会場へ向かった。

ウエストン祭は、穏やかであるが充実していた。日本は西洋の登山が伝道される前から、山岳信仰によつて各地で山道が拓かれていた。これが日本で登山が大衆まで広がった大きな要因である、との講演内容には深く感銘を受けた。

ウエストン祭の式典の後、上高地温泉ホテルに向かい午餐会に出席した。上高地の関係者や信濃支部の会員ら多くの方が出席され、イベントを改めて祝福された。テーブルにはオードブルとお酒、そして例年どおりカレーライスが振る舞われた。

(会員番号16042)

支部長が変わりました

岩手支部 阿部陽子さん

岩手支部は1972年に創立、初代支部長は笠原潤二郎・岩手大学教授で、1975年にマルビティン中央峰を初登頂しましたが、伊藤寿会員を失いました。3年後、佐藤敏彦氏(岩手医大)に交代、以後の山行のほぼすべては北上山地の踏査に充てられ、今西錦司、望月達夫氏らが頻繁に来県、同行されました。それらは『かぬか平の山々』などに発表されています。

そのころ、私は岩手大学特設美術科に在籍する学生で、登山を始めたばかりでした。敏彦氏が美術の聴講生でいらした奇縁もあり、日本山岳会に入会しましたが、残念ながら敏彦氏は、腎臓病のため58歳で亡くられました。その後、に虫の研究で知られる中谷充氏が就任。毎夏の日本アルプスをはじめ、



岩手支部長 阿部陽子さん

中谷支部長と山を一緒にすること、私は多くを学びました。また、山形集会での小倉童子さんとの出会いにより関東・中部山域に行動範囲を広げ、かつ盛岡RCCや県山協指導員会で訓練を深めました。チャクラギール山域を目指していた岩手医大山岳部を指導した利部輝雄会員に指名され、1998年に私が踏査偵察隊長を務めました。4代目菊池修身氏は2003年に交代し、同じ奥州市の小野寺正英・事務局長と組んで発展が期待されましたが、2008年、岩手県南部地震で被災、大怪我をして辞任されました。内山達雄氏が2009年から就任し、私が事務局長として仕えました。諸事情から北上市の菅原敏夫氏が2012年に支部長に就任、菅原体制になって、懸案事項であった公益事業山行と支部費徴収が実施されました。しかし現在、会員の山行への参加が減少しているのが実情です。新体制では例会山行を充実させ、新規会員を勧誘するなど、なんらかの活性化を図らなければなりません。会員各位からご援助いただき、支部長として微力ながら会の歴史の継続に努めたいと思います。

東海支部長 高橋 玲司さん

このたび東海支部長に就任しました高橋玲司です。東海支部は愛知・三重ですが、私は岐阜市在住、年齢は46歳、小学2年生と中学2年生の娘がいます。私自身、東海支部との関わりは長く、1988年、18歳のときの山岳部入部以来であり、今年で28年目です。

東海支部としては、以下の「トリブルワン」をスローガンに取り組んでいきます。

安全第一

大英辞典によると「楽しみを前提とした無償の行為すべてがスポーツ」であり、当然、登山もこの定義に該当します。支部では昨年、2名の死亡者が出てしまいました。これはスポーツであり、レジャーであり、趣味である登山としては、あり得ない事実です。山登りは命を懸けて、生きるか死ぬかであった



東海支部長 高橋玲司さん

てはいけません。安全登山を目指し、取り組んでいきます。

一体感を持つ

現在、東海支部は350名の支部員で、21の委員会と4つの組織を配下に持つ、日本山岳会の中でも最大級の支部です。しかし、支部の大きさからか、支部員同士の連携が取れていないのも事実です。今後、支部員がますます活性化でき、支部全体で一体感が感じられるように取り組んでいきます。

No.1を目指す

山登りがスポーツである以上、より困難、より高きを目指し、肉体の限界を最大限に発揮できるパフォーマンスを目指したいと思います。支部員皆さんのNo.1は、それぞれ違うオンリーワンであって良いかと思いますが、皆さんのそれぞれのレベルで、最高のNo.1を目指す登山を指向していきたいと思っています。

幸いにも近年、様々な取り組みの成果で、東海支部には若い人たちが多く集まってきております。彼らとともに先輩方と連携を持ち、すべての世代が交わり集える、一体感のある、未来志向のすばらしい支部を目指していきます。

支部長が変わりました

関西支部長 金井 良碩さん

昨年来、重廣恒夫・前関西支部長の本部監事就任に伴い、関西支部長席が空席となり、副支部長の私が代行してまいりましたが、本年4月の支部総会において改めて支部長に選任され、5月の日本山岳会理事会において承認される運びとなりました。関西支部が支部長を置くようになった昭和23年から数えて7代目の支部長です。

私が日本山岳会に入会したのは、若いころに参加した1970〜71年の「アタカマ高地探検隊」(向一陽隊長が、山岳会の後援を受けることがきっかけであったように記憶しています。その後、私の出身母体である神戸大学山岳会の大先輩・金井健二さんに「関西支部を手伝え」と言われて、当時、駒公園の大阪スポーツマンクラブにあつ



関西支部長 金井良碩さん

た支部に出入りするようになったのは、昭和48年ごろでありました。以来、今西壽雄、阿部和行、重廣恒夫の各支部長とともに関西支部を歩んでまいりました。

昨年、関西支部は設立80周年を迎え、記念誌の発行、記念式典・フォーラムの開催、近畿県境縦走、海外登山隊の派遣などを記念事業と位置付け、実施してきました。記念式典へのご参加とともに事業募金には、関西支部はもとより、全国から多大な基金を頂戴しましたことを篤くお礼申し上げます。

なかでも、秋に実施する「東ネパール登山隊2016」は、ナンガマリII峰(6209m)の初登頂と、I峰(6547m)への縦走を目指すもので、支部報により参加隊員を公募し、重廣恒夫隊長の下に、山域の調査、登山タクティクスの研究、高所トレーニングなどを重ねている、いわば関西支部手作りの登山隊であります。この登山隊の成功が関西支部の今年度最大のテーマであり、支部の活性化、ひいては登山界の発展に寄与するものと考えておりますので、引き続きのご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

福岡支部長 高木 荘輔さん

8年間、副支部長を務めてきて、このたび支部長に任命されました。改めて身の引き締まる思いです。私も若いころから山登りが好きで、職場山岳会や地域山岳会に所属していたお陰で、北は北海道から南は屋久島まで、日本の主な山にはほとんど登ることができました。

また、故・脇坂順一先生(登山家・久留米大学医学部名誉教授)と行動をとともにさせていただいたり、仏・グルノーブル大学夏期留学(3年連続)を利用して海外の山々にも積極的に出かけ、延べ30ヶ国、100山以上に登りました。さて、我が福岡支部は来年、設立60周年を迎えます。過去の支部活動では、1992年シシャパンマおよび1998年ナムナニの登頂、2001年から05年にかけて、5度にわたるヒマラヤの東、カン



福岡支部長 高木荘輔さん

リガルポ山群の踏査・探検など執筆すべきものがあります。しかし、どちらかというと伝統的には、会員はそれぞれが所属する地域山岳会で活動し、日本山岳会はサロンという雰囲気強いものでした。

現在は、「岳人のつどい」(山の映画の上映や講演会)、「パハルフェスタ」(坊がつる)「後援」、「自然観察登山会」(テーマがあり専門講師付き)、「山のトイレ・環境を考える福岡協議会」活動、「安全登山のための知識と技術」の公開登山講座など、いろいろな活動を行なっています。

今年は8月11日の「山の日」に福岡県民を対象に、山岳諸団体と協同して、英彦山をはじめいくつかの山で登山大会を行ないますが、まずは6月25・26日に開いたプレイベント「夏山フェスタ in 福岡2016」が成功裏に終わったことが、大きな自信となりました。

今後の大きな問題としては、会員の「高齢化」と「減少」が慢性的に続いていることです。先進支部の事例にも学びながら、なんとかしてこの傾向に歯止めをかけ、反転攻勢に転じるべく、これからも努力したいと考えています。

支部長が変わりました

北九州支部 関口興洋さん

昭和14(1939)年2月に、関門海峡に面する門司の地で生を享けましたが、山との関わりは昭和29(1954)年の春、中学卒業のときに、恩師の引率で出かけた九重山から始まりました。

その後、最も影響を受けた書物が田部重治の『山と溪谷』で、奥秩父の森林と溪谷の美しさを論じた文章に魅せられました。それまで登山といえば山頂を極めることしか考えなかったのですが、この本で日本の自然美の奥深さを認識させられ、60年以上たった今でも、当時の新鮮な感動が残っています。これに触発されたせいか、九州の好きな山域は、森と溪流が美しい祖母・傾・大崩周辺と屋久島です。

5月14日の支部総会で5代目の支部長として選任されましたが、



北九州支部 関口興洋さん

日本山岳会が抱える共通の課題を少しでも克服しながら、会員がクラブ・ライフを楽しむことができるように、微力ながら一歩一歩取り組んでまいりたいと思います。

今年から8月11日が「山の日」として国民の祝日となりました。この機会をとらえ、地域の一般市民、山岳愛好家の山への関心を一層深めていただくため、「山の文化展」や「家族登山」などのイベントを開催いたします。これらの行事は、北九州市役所、毎日新聞社、北九州観光協会の後援をいただき推進中です。このイベントが新規会員獲得の布石になればと願っております。

門司区の風師山に横有恒・元会長の記念碑と略歴碑が設置されており、今年にはマナスル初登頂60周年を記念して、5月に碑前祭を行ないました。横さんの立派な業績が風化しないように、横さんが風師山に足跡を印された昭和32(1957)年10月28日を記念して、来年以降、10月に碑前祭を開催していきたいと考えております。

創立100周年記念学術調査隊 マウンテンフライトと現地 調査のご案内

ゴジュンバ氷河の学術調査隊の概要を、6月号に続きお知らせします。写真はチョー・オユーの下部、ゴジュンバ氷河を上流から見下ろしたものです。このように氷河と山をマウンテンフライトし、多くの写真記録を残すことが目的です。飛行コースはすでに計画済みで、想定されるコースに沿って飛ぶものです。

また水深測量の試験を志賀高原の木戸池で実施しました。GPSを見ながらボートを漕ぎ、水深を測って数字を記録するのです。そのグラフから水深図を作り、氷河後退の現状をつかみ未来を推測します。水深図の作成もだいぶ上達しました。これが氷河の水で、周りが氷河だと想像すると、やはり心がはりました。

氷河のマウンテンフライトは、酸素の補給を考えてカトマンズを起点にするかも知れませんが、天候特に風の影響を受けずにどう飛ぶか、近く航空会社と打ち合わせるつもりです。航空機のチャーター料は高

いので、有効な飛び方に気を遣います。風の影響もあるので、初めてのコースでは目的と外れることもあります。元のコースに戻るだけで、10分(6万円)、余分な経費がかかりません。

期待した成果を得るために、これまでの経験フルに生かして飛行コースを決めていきたいと思えます。資金の援助も含めて、ぜひ会員の皆さんの参加をお待ちしております。

計画の詳細につきましては、大森宛にお問い合わせください。

✉ zero@qb3.so-net.ne.jp

(大森弘一郎)



上空から見たゴジュンバ氷河

「山の日に向けて」山を考える⑫ (最終回)

祝日「山の日」と山岳団体の私たち

渡辺 悌二

読者の皆さんは、すでに「山の日」が単に山に登る日ではないことを十分理解されていることと思います。もちろん「山の日」に山に登ることは大いに勧められますが、山頂を目指す行為とともに山について考え、山のために行動をする一日として「山の日」を位置付けることが重要だと思います。

高齢化社会に重い課題

祝日「山の日」の意義をどうとらえ、山岳団体の私たちが関わっていくか。制定運動の中で《美しく豊かな自然を次の世代に引き継ぐ》ことを掲げましたが、引き継ぐことの難しさを、私たちは今、強く認識する必要があると思います。将来展望が大切です。

少子高齢化社会の中で、山とどのように付き合っていくのか、真剣に考えねばならないときにきています。現政権は「地方再生」「創生」と声高に叫んでいます。聞こえてくるのは、私に言わせれば、人が生活する集落の存続をどうす

るかについてばかりで、日本の国土の約7割を占める山(森林)の将来、位置付けについての議論は、ほとんどありません。

私たちはどのように山と付き合うべきなのか。これは、私が関わった2002年の国際山岳年では大きな焦点にはなりませんでしたが、議論の中でその芽は出ていました。山(森林)は人類の生存、地球上の生物多様性にとって不可欠の存在であるという認識、森林の保護、育成、適正利用に必要な人材の確保、などの問題提起です。

これらの問題解決に当たって少子高齢化の影響は、今後10～30年間に私たちが取り組みねばならない最大の課題です。この「深刻な」問題にいか「真剣に」向かい合うのか「山の日」で問われることとなります。もはや、日本の山はきれいだとか、優れているだとか言っている場合ではないと思います。

山を思うなら、山のために、しだけ先のことを考えてみてはい

かがでしょうか。登山道の維持管理に関しても、山のトイレ問題についても、今、この状況をなんとかしたいという強い思いで、全国各地で活動が行なわれています。その際10年先にも今と同様に活動ができるのか、あるいは20年30年先はどうなのか、という点に目を向けねばなりません。

山岳団体は日本社会の縮図

日本山岳会だけではなく、日本の山岳団体のほとんどは会員の高齢化に悩んできました。

この傾向は今でも続いています。今後ますます解消されないでしょう。その原因の一つは多くの先達には無礼を承知で敢えて書きませんが、年を取った健康な会員に有能な人たちが多過ぎることだと思えます。有能故に皆さん「現役」で居続けたい。健康だからそれが可能なのです。

似た状況は、日本社会の至る所で生じているのではないのでしょうか。私は大学教員で、いくつかの学会に関わっていますが、そこでも状況は同じです。でも、だからといって、高齢の人たちがいつまでも活動の中心にいては、大勢の

若い人たちが容易に参加することなどできません。

会員の若返りを考えるなら、若い人たちが自由に議論を行なえる環境を整備し、私たち「年寄り」は、若い人たちが出した結論の受け止め役に徹するべきだと思います。一刻も早く次世代にバトンタッチしなければ、山の将来は大変なことになると思います。

次世代へのバトンタッチの日

私は日本林業協会の雑誌で「山の日」は次世代へのバトンタッチの日である」と書きました(『森林技術』2016年5月号)。この原稿の中で「山の実現には研究者ではなく山岳団体の貢献が大きかった」ことを書きました。「山の日」の実現に至った今、登攀技術の伝承だけではなく、山の維持管理や自然保護を次世代にうまくバトンタッチしていかねばなりません。それが「高齢化の進んだ」山岳団体が「山の日」に行なうべき役割なのではないのでしょうか。「山の日」の成否は、次世代へのバトンタッチを毎年、確実に進めていけるかどうかにかかっているのではないかと思います。



川上 隆 (かわかみ たかし) 会員番号No.4026

1952(昭和27)年: 日本山岳会入会
 1957(昭和32)年: 防衛大学校山岳部コーチ就任
 1961(昭和36)年: 防大山岳部監督(～1973年)
 1965(昭和40)年: 防大カナダ・ローガン峰登山隊長
 1969(昭和44)年: 防大アルゼンチン・アンデス登山隊長
 1973(昭和48)年: 日印合同シクルムン登山隊長(自衛隊)
 1980(昭和55)年: 防大山岳会(OB会)会長
 1981(昭和56)年: 防大コングール・チュピエ峰(中国)登山隊長
 1987(昭和62)年: 日本山岳会評議員(～1989年) 防大チョモランマ峰(中国)登山隊長
 1992(平成4)年: サンデインカンシヤ峰(中国)登山隊長
 1993(平成5)年: 山形大学コーボルト会コングール山群(中国)学術登山隊総隊長
 1995(平成7)年: 日本山岳会学生部ムスターグ・アタ山群(中国)登山隊総隊長
 2002(平成14)年: 日本山岳会名誉会員・永年会員
 2016(平成28)年5月12日: 天寿を全うす。行年89

厳しかった川上監督を偲ぶ

村田光昭

日本山岳会名誉会員であり、異色の防衛大学校山岳部のコーチ(4年)、その後監督(12年)として招聘され、約16年の永きにわたり、将来、自衛隊の幹部となる学生に「登山活動を通してのリーダー・シツプの養成」と「ボーラー・システムを主とする安全登山」を基本とする部活動を指導された川上隆さんは、5月12日にご逝去されました。

川上隆さんが防衛大学校の部外監督になられたのは、防大創立当初に、山の同好者が集まった山岳部が2年連続して死亡事故を起こしたためで、当時、川上氏の知人で防大山岳部長の朝井教授と、登山家としても有名な横防大校長の肝いりで招聘されたとのことでした。そんな経緯もあり、私が昭和32年に防衛大学校に入学して山岳部に入学したときの訓練は、真に厳しいものでした。その余りにも厳しいスパルタ教育に部員は悲鳴を

上げながらも必死に努力して、徐々に山岳に関する知識や登山技術を会得して、昭和34年の冬山合宿で、部創立以来の目標であった厳冬の鹿島槍ヶ岳の登頂に成功しました。吹雪の鹿島槍ヶ岳頂上で、川上さんとアタック成功の喜びの握手をした笑顔を今でも思い出します。その成功で自信を得て、爾後、山岳部の技量は飛躍的に向上していきました。

そして、いつの間にか海外遠征、特に南極の極点への夢が話題に上るようになりました。しかし、昭和30年代後半から40年当時は、自衛隊に対する風当たりは強く、海外遠征などは夢のまた夢でした。昭和39年の東京オリンピックの折、私は自衛隊のオリンピック支援集団の一員になり、代々木のオリンピック選手村勤務でしたので、カナダ・アラスカ選手団長に面会して、海外遠征をしたいので、ぜひ招待状をいただきたい、と唐突なお願いをしました。

その結果、奇跡が起きました。約1年後、アラスカ州知事およびカナダ山岳会長から、外務省を通じて防衛庁長官宛に招待状が来たのです。寝耳に水の防衛庁は驚愕して、私は松本駐屯地から呼び付けられ、川上監督とともに防衛庁本部で詰問されましたが、「これほどの正式な招待を受けると、国際儀礼上断れない」とのことと、北米のローガン峰に遠征隊を出すことが決定、川上監督が登山隊長でした。その4年後には、南極への足がかりを得るため、朝井山岳部長を総隊長にして南米アンデスの未踏峰セロネグロ峰へ遠征し初登頂、さらにヒマラヤ、カラコルム、中国・新疆ウイグル自治区、総決算としてのチョモランマ登山など、8回もの海外遠征ができました。

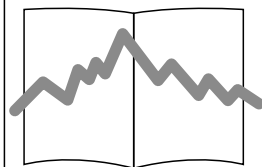
このような偉大な成果を収められた川上監督でしたので、監督を引退された後もOB会の会長にもなっていたいただきました。登山で鍛えて頑健な川上さんでしたが、20年ほど前に体調を崩されて入院・手術後、風光明媚な真鶴半島に転居・静養されておられました。5月12日にご逝去されました。川上監督! あなたのご指導は、脈々と防大山岳部の中に受け継がれております。現役およびOB一同、永きにわたるご指導に心から深謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

追

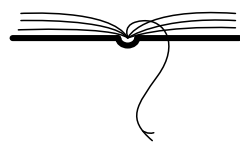
OBITUARY

悼





図書紹介



菊地敏之著

新版 日本の岩場 上・下巻



上巻2015年4月
下巻2016年4月
白山書房
各A5判 160頁
2000円+税

アルパインクライマーにとって待望の書籍がリニューアルされた。これは、かつて同社から出版されていたものをベースに、ほとんど登られていないルートの削除や、新しいルートの追加をみて、時代に即した新刊として作り替えられたものである。

新版が出る前、インターネットでは旧版が5000円を超える価格で売られ、また別のトポ(ルート図集)も、定価の数倍の値がついているものもある。今は山の壁にも、少しずつ人が増えてきているように感じるが、新しいクライマーは

情報を求めているのだ。

インターネットでなんでも調べられる時代に、紙のトポの需要が高いというのも面白い。

しかしながら、谷川岳では一ノ倉沢烏帽子沢奥壁南稜、衝立岩中央稜などに、北岳バットレスでは4尾根、剣岳では八ツ峰VI峰フェースなど、残置支点が多く、落石などの不確定なリスクの比較的不いルートは行列になることもあるが、ちよつと離れたいわゆる悪い岩場ではクライマーの姿を見ることがも稀で、人気ルートの一極集中型の傾向だ。こういった時代背景を鑑みて、グレードを大幅に改定しているところも、実はかなり大きなトピックスである。

序章で筆者がアルパインクライミングの心得として、3点を挙げているので紹介したい。

・そのルートは、そのルートに見

合った能力を身につけた者だけが、登ることを許される。

・不必要な人工手段を投入しない。ルートを独占しない。

つまりは、「力のないものがその力のなさの裏返しとして、ボルトや、不必要な支点の打ち足し、残置をする、渋滞を引き起こして他のパーティーをも危険にさらす。それは、そのルートを辿ったことにはなつても、ルートを登ったとは言い難い」のだと。日本の登攀史や文化を知らない者にとっては、少々うるさく感じられるかもしれない。

しかしながら、クライミングとはそういうものであり、先人に敬意を払って、それをより前進させた手間で登つてこそ、クライミングの進化といえよう。日本のアルパインクライミングはどういう方向に向かうのであろうか? (天野和明)

犬と走る

本多有香著



2014年4月
集英社インターナショナル
四六判258頁
1800円+税

夢を追いかける、諦めないとは

こういうことなのか。本多有香、著者の行動力は、並み外れている。

本書は、お金も人脈もない、知識も技術もない、ないない尽くしの大和なでしこが、単身渡米、十数年間極寒の地で悪戦苦闘、夢を夢で終わらせなかった本気度100%のドキュメントである。

その夢とは、「犬と一緒にどこまでも走りたい」。それは、犬ぞり師Ⅱマッシャーになることだった。

学生時代、カナダ旅行で初めて犬ぞりと出会う。特にそりを引くアラスカンハスキーたちの喜々とした様子に心惹かれた。走りたい、犬たちと一体になってどこまでも走る自分を想像し、心ときめいた。けれどそれは夢物語だとも思った。普通の人は、ここで終わる。だが、数年後厳格だった父親が他界、著者は夢物語に向かって一気に動き出した。なんの保障もない未知の世界へ、自分だけを信じて飛び出した。自称父親に似て変わり者だという。25歳の旅立ちとなった。

カナダで覚えたハンドラーの仕事は前哨戦に過ぎず、著者の本当の凄さは、犬ぞり長距離レースを夢見て、単身ボロ自転車で渡るアラスカへの旅から始まる。生命力

と運の強さを感じる。

ハンドラーとしての収入もわずかな中、タフな体力と精神力で苛酷なハプニングを次々と乗り越える著者、ときには女性にして大胆過ぎる場面もあり、生き抜く図太さとしなやかさにしばしば絶句。

物怖じしない行動は、日本人には少し受け入れ難いものがあるかも知れない。が、大陸の人々は温かく、実にフレンドリーだ。持ち前の明るさと大好きなビールで、現地の人々に溶け込んでいく交流感覚がずば抜けている。日本を飛び出して十数年後の2012年、4度目にして遂に、長距離レース「ユークンクエスト1600 km」を完走した。初めて自分の犬舎を持ち、鍛錬してきた犬たちとのゴールであり、夢にまで見た瞬間である。

現在、カナダで26匹の犬たちとの暮らしが続いている。電気も水道もない手作りのキャンピングだが、日常生活に少しも不便を感じていないと言い切る。こういう著者だからこそ、夢が叶ったのだと納得できる。2015年、植村直己冒険賞受賞。強さと優しさと諦めない精神に、真にふさわしい受賞である。

(書間弘子)



平成28年度第3回(6月度)理事会 議事録

日時 平成28年6月8日(水) 19時
00分～21時05分

場所 集会室

【出席者】小林会長、吉川・大久保・
山田各副会長、神長・佐藤
各常務理事、勝山・野口・
大槻・山賀・直江・星・谷
内各理事、平井・重廣各監
事(所用のため平井監事は
審議事項2まで、直江理事
は報告事項9まで欠席)

【欠席者】中山・落合各理事

【オブザーバー】節田重節「山」編
集人

【審議事項】

1・委員会規程「別表」の改正につ
いて

YOUTH CLUBの組織変更
に伴う委員会規定の改正について審
議した。(賛成12、反対なしで承認)

2・支部長の就任承認について

以下2名の支部長の就任につい
て審議した。

東海支部 高橋玲司(12955)

(事由) 小川務支部長からの交代に
よる就任

福岡支部 高木莊輔(12920)

(事由) 中馬重人支部長からの交代
による就任(賛成12、反対なしで
承認)

3・入会希望者の承認

16名の入会について別添資料に
より審議した。(賛成12名、反対な
しで承認)

【協議事項】

1・平成28年度会議日程について
(佐藤)

平成28年度の常務理事会及び理
事会の開催日程について協議した。

2・支部合同会議の開催について
(佐藤)

東日本支部合同会議を9月10日

(土)～11日(日)、西日本支部合同
会議を9月24日(土)～25日(日)の
日程で開催することについて協議
した。

【報告事項】

1・北九州支部からのJACマー
ク使用承認申請を許可したとの報
告があった。(佐藤)

2・「アルパインフोटビデオク
ラブ」の名称を「アルパインフオ
トクラブ」と変更したとの報告があ
った。(佐藤)

3・準会員制度新設に伴い準備中
である準会員規定案の見直し状況
について報告があった。(佐藤)

4・吉川副会長の「高尾の森つく
りの会」代表就任に伴い、山田副会
長が担当業務執行理事となったと
の報告があった。(吉川)

5・国土地理院「電子国土賞」の選
考方法について他薦が廃止となっ
たとの報告があった。(佐藤)

6・一般財団法人「全国山の日協
議会」の理事会構成について報告
があった。(小林)

7・6月5日(日)に開催されたウ
ェストン祭の開催状況について報
告があった(小林・大槻)

8・7月10日(日)に開催されるマ

ナスル初登頂及び国民の祝日「山の日」記念事業の準備状況について報告があった。(大久保)

9・14件の寄付金・助成金受入の事前申請、受入について報告があった。(吉川)

10・日本山岳会の予算と今後の財政見通しについて報告と施策の提案があった。(吉川)

11・日本で開催される三国学生交流登山の日程について報告があった。(吉川)

12・7月26日(火)に開催される山岳遭難防止セミナーについて報告があった。(佐藤)

13・平成29年度全国支部懇談会の主管は茨城支部となるとの報告があった。(谷内)

【連絡事項】

1・再生委員会 6月21日(火)19時 集会室

2・平成28年度通常総会6月25日(土)14時 TKP市ヶ谷ビル9階

3・同好会連絡会議 7月4日(月)18時30分 104会議室

4・マナスル初登頂60周年および国民の祝日「山の日」施行記念事業 7月10日(日)10時15分開場 J

ICA市ヶ谷ビル
5・次期理事会等

・7月度常務理事会 7月6日(水)18時30分 集会室

・7月度理事会 7月13日(水)19時 集会室

会員異動(6月)

物故

山本 佑介 (4261) 15・10・17

小林 優 (7619) 15・5・1

新井陽一郎 (8253) 16・6・13

飯田武夫 (8257) 16・4

藤川三郎 (9464) 16・6・5

中川 尚 (10763) 14・10・31

小宮山鐸朗 (13636) 16・5・26

退会

藤井 健 (3425)

野地克也 (7539) 福島

石村揚正 (8271) 京都・滋賀

佐伯節子 (9077) 北海道

田中賢治 (9240)

村上賢二 (9454)

佐藤英夫 (9813) 岩手

山口悠紀子 (9894)

小林康浩 (11620) 千葉

時田 稔 (11692) 東京多摩

松田昭郎 (12705) 東京多摩

岩本和夫 (12912)

小林 貢 (13014) 関西
窪田知雄 (13175)

五十嵐安雄 (13308) 東海

木元きよ (13340)

山田 治 (13357) 神奈川

本山芳裕 (13881)

宮城尚志 (13987) 北九州

丸子博之 (14163)

外ノ池倫平 (14173)

佐藤善則 (14200) 東九州

名倉健児 (14207) 静岡

國友繁明 (14291) 京都・滋賀

鍋木明夫 (14524)

塚田 寛 (14596)

井ノ口貞利 (14659) 広島

黒木 甫 (14887)

有元久住 (14892) 静岡

中島由之 (14910) 広島

阿比留定幸 (15083) 広島

ルーム日誌 6月

1日 常務理事会 山行委員会

2日 YOUTH CLUB

6日 総務委員会

7日 家族登山普及委員会 スケッチクラブ

8日 理事会 休山会 山想倶楽部

9日 フォトクラブ 山の自然学

研究会 山岳地理クラブ
九五会

10日 図書委員会 YOUTH CLUB

13日 総務委員会 医療委員会

「山の日」事業委員会 スキークラブ

14日 山岳研究所運営委員会 スケッチクラブ

15日 青年部 三水会 つくも会

16日 科学委員会

17日 総務委員会

18日 総務委員会 山の自然学研究会

20日 総務委員会 資料映像委員会

マウンテンカルチャークラブ

21日 再生委員会 スキークラブ

22日 自然保護委員会 フォトクラブ

23日 公益法人運営委員会 学生部 01会 山遊会

24日 総務委員会 緑爽会 みちのり山の会

27日 総務委員会 支部事業委員会 YOUTH CLUB

28日 デジタルメディア委員会

29日 遭難対策委員会 YOUTH CLUB

6月来室者 496名



インフォメーション

◆「高尾599ミュージアム」における日本山岳会行事のお知らせ

「高尾599ミュージアム」は、昨年夏に完成した高尾山の麓にある八王子市の施設です。599は高尾山の標高によって名付けられております。日本山岳会は、開設当初より2階市民ギャラリーを利用してのイベントに協力しており、本年8月11日の国民の祝日「山の日」に関連して、以下の行事を予定しております。会員の方は、高尾山にお越しの際には、お立ち寄りいただくようお願い申し上げます。

「599ミュージアム」HP

<http://www.taka599museum.jp/>
開館時間 8:00～17:00(4月～11月 最終入館16:00)

平成28年8月1日(月)～8月9日(火)
「山の日」制定記念・日本山岳会パ
ネル展Ⅱ高尾599ミュージアム
共催

日本山岳会のマナスル初登頂か

ら「山の日」制定に至るまでの60年間の軌跡を振り返り、地元で行なっている高尾の森づくりの会の活動も紹介します。

1・「山に親しむ機会を得て山の恩恵に感謝する」という山の日制定の意義の紹介

2・高尾の森づくりの会の紹介を通して自然保護活動と高尾の自然に関する展示

3・日本山岳会の111年の歴史と60年前のマナスル初登頂に関する展示

4・ネパール大震災の実態と復興支援に関するパネルの展示

平成28年8月7日(日)

高尾山・親子森育ハイキング教室

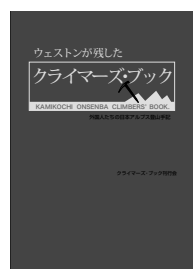
Ⅱ高尾599ミュージアム主催

東京多摩支部共催

10月8日(土)、9日(日)、10日(月祝)

日本山岳会アルパインフォトクラブ写真展Ⅱ高尾599ミュージアム共催

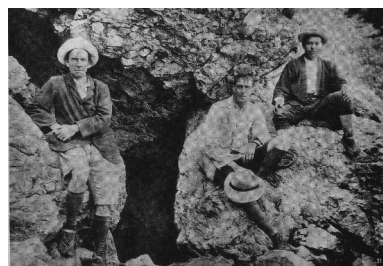
W・ウェストンが残した日記を全訳出版へ



2016年8月11日刊
信濃毎日新聞社
1500円＋税

日本の近代登山の父とも称される英国人宣教師ウォルター・ウェストンの温泉宿に残した外国人登山者用の日記帳が、8月11日に初めて迎える国民の休日「山の日」に合わせて、解説付きの全訳本として出版されることになった。ウェストンをはじめ外国人登山者ら約80人が、当時の北アルプス登山の様子を綴っている。

日記帳はA5判、172ページ、表紙に「KAMIKOCHI ONSENBA CLIMBERS BOOK」と刻印されたもので、最初の6ページには、ウェストンが近代登山の黎明期に活躍した上條嘉門次と穂高連峰に登った様子が記されている。「急増している上高地の外国人登山者が関心をもつ登山の記録を(略)残していく何らかの手段の構築が望まれる」と、日記を残した意義も綴られている。



M.G.K.(神戸在住外国人の山岳会)の会報「[NKA]」(大正4～13年発行)に掲載された外国人の槍ヶ岳登山の様子

特に1915(大正4)年の焼岳噴火に遭遇した米国人男性の記述が5ページにわたって詳細に綴られている。6月6日の午前7時ごろ、噴火による地震で驚いて目をさました筆者は、「巨大な噴煙柱が立ち上がった」と、驚きと恐怖の様子が書かれている。噴火によって噴石が上がり、爆風や火砕流も発生、梓川の流れがせき止められて、堰「大正池」ができていたという。当時の体験が記録として残されており貴重な資料といえるだろう。

松本市や地元の観光団体、日本山岳会などが刊行会を結成、信濃毎日新聞社が製作した。会員には特別に8掛けで販売、10冊以上の購入者には送料無料という。

問合せは、信濃毎日新聞社出版部
TEL 026-2336-3377へ。

◆日本三百名山登頂シリーズ⑧

中央アルプス深南部に位置する
越百山以南の藪山縦走を楽しむ2
泊3日の山旅 参加者募集!

【第8回日程・行程など】

期間 8月30日(火)～9月1日

(木)

集合解散 JR中津川駅改札前8

時集合、JR飯田駅18時ごろ

解散予定

行程 1日目/中津川駅⇨伊奈川

ダム登山口⇨越百小屋泊2

日目/越百山⇨奥念丈岳⇨

安平路山⇨安平路避難小屋

泊 3日目/摺古木山⇨大

平高原⇨飯田駅

参加費 6万3000円(現地移

動交通費、現地宿泊代、食事
代、避難小屋でのシユラーフ
無料貸し出しあり)

定員 1グループの定員10名申込

み・問合せ 〒105-000

03東京都港区西新橋2-8

11 第7東洋海事ビル4F

アルパインツアーサービス(株)

TEL 03-3503-0223

FAX 03-3508-2529

担当⇨国内事業推進課・児玉

まで(ケータイ)090-80

23-9622)

✉kokunai@alpine-tour.com

*お申込みの方に詳細なご案内を
お送りいたします。

(創立百十周年記念事業実行委員

会/山行委員会)

◆「木の目草の芽」122号を発行

自然保護委員会

自然保護委員会機関紙「木の目

草の芽」122号を発行しました。

今号は、自然保護全国集会(7月16

日高知県で開催)のレジュメ号と

して、大会プログラムのほか、全

国の支部自然保護委員会から寄せら

れた活動報告・近況報告を掲載し

ています。

購読申込み 川口章子 TEL 04

7-463-8721

✉syuaki@pony.ocn.ne.jp まで。

また、ウェブサイトででもご覧い
ただけます。

JACホームページ⇨日本山岳会

の活動案内⇨自然保護委員会⇨委

員会ウェブサイト⇨機関紙

http://www.jac.or.jp/info/inkai/

shizenhogo/newsletter.html

◆第34回図書交換会の出品図書募

集について 図書委員会

本年度も図書交換会を年次晚餐

会の会場で開催します。本棚に眠

っている山岳書をお寄せください。

会場で希望者に頒布します。

出品図書は8月末日までに、氏

名、会員番号を明記して「日本山岳

会・図書委員会」宛にお送りくだ

さい。頒布価格は図書委員会に一

任させていただきますが、頒布が

成立した場合は、価格の8割を出

品者にお返しします。なお、原則

として出品点数は一人50点までと

し、当会の刊行物ならびにガイド

ブックと雑誌はお断わりします。

判断が難しい場合は事前にお問い

合わせください。

問合せ 三好まき子 TEL 090-8

019-8601 ✉344mm@

mbe.nifty.com)

◆白神山地ブナ林再生事業と自然
観察会

青森支部

世界遺産・白神山地のバッファ

ー・ゾーン周辺の生育不良杉林地

をブナ林に再生するための除伐や

植樹などの作業、および原生ブナ

林の観察会を行なう。寝袋、食料

必携。作業道具、テント等はここ

らで用意可。

日程 9月24日(土)～25日(日)

集合 24日8時JR弘前駅城東口

および10時30分奥赤石林道

会報「山」の目録が完成

会報「山」は付録として目録をつけていますが、このほど801号から850号までの目録が完成いたしました。今回は、記事データのみを作成し、印刷は会員各自で行なっていたいただきます。ホームページからダウンロードして、プリントアウトして下さい。
<http://jac.or.jp/kaiho-yama-somokuji.html>

なお従来どおり紙での印刷を希望される方には、実費にてお譲りいたします。送料込みで切手200円分をお送り下さい。到着次第、目録をお送りいたします。またルームでの手渡しも可能です。その場合は実費150円(現金)をいただきます。また会報と併せて製本もお引き受けします。ご希望の方は、8月末までに原本を事務局までお送り下さい。

- 1・製本業者は前回(2012年4月)と同じです。
 - ①全面同色(ブルーグレー)ハードカバー
 - ②背表紙にタイトルと会員番号を印字
 - ③索引は巻頭綴り
- 2・欠号分は各号150円で補充可能ですが、在庫がない場合はコピーで代用となります。
- 3・製本費用は梱包と返送費用を含めて4000円です。ルーム受取りの場合には500円引きですので、その旨お書き添え下さい。製本代金は、書籍発送時(9月末頃)に振込用紙を同封しますので、後日お支払い下さい。ご不明の点は事務局までお問合せ下さい。

(会報編集委員会、図書室・田村)

ゲート

解散 25日15時奥赤石林道ゲート、

18時弘前駅送迎可

経費 500円(通信費、保険料等

として当日徴収)

定員 30名

申込み ハガキ、FAX(0172

44-7237)メールで須々

田秀美宛(〒036-010

3 平川市本町北柳田96-2

② h.susuta@gmail.com) 9月

14日までに

◆東京多摩支部 安全委員会講演

会 活火山の安全登山開催

日時 7月20日(水)18時30分〜20時

30分

会場 立川市女性総合センター5

階第3学習室

講師 福岡孝昭(科学委員会)

定員 80名(申込順 締切7月18

日)

入場 300円(会場費・資料代)

申込み 中村美奈子

② minaminajactama@gmail.com

◆東山一勇いきりえ個展

アイガー、ユングフラウ、メン

ヒ、マウナ・ケア山(ハワイ島)、ハ

イリゲンブルート(オーストリア

登山基地)、レーニア山(シアト

ル)、白川郷、立山連峰、奥入瀬

上高地帝国ホテル、吾妻山、磐梯

山等もきりえ作品に登場します。

日時 8月22日(月)〜28日(日) 11

18時(最終日は15時まで)

場所 ギャラリーくぼた本館(4

階)〒104-0031 中

央区京橋2-7-11

<http://www.gallery-kubota.co.jp/>

問合せ 東山一勇 ② 0467-

44-5532 ② higashiyama

@now.mfnet.ne.jp

[http://www.jp.kirie.com/koten.](http://www.jp.kirie.com/koten.html#hiroba_jin)

html#hiroba_jin

訂正

●平成28年度通常総会(資料)中に

以下の誤りがありました。

10頁(会員の動向)「会員数は平

成27年3月現在5036名」は「会

員数は平成28年3月現在5020

名」、58頁の「登山委員会」は「山行

委員会」の誤りでした。

●会報4月号(851号)4頁「ネ

パール大地震募金のご寄付者一

覧」中の「3万円」の項で「酒井紘

一」とあるのは、「ゆきわり会」に

訂正してください。

*東西南北「秘峰登山のススメ

(下)」は次号に掲載いたします。

◆編集後記◆

●7月10日、当会主催で『マナス

ル』から『山の日』まで60年、いま未

来に伝えること。』というイベント

が開催されました。詳細は当会報

の次号で報告しますが、200名

近い参加者があり、過半数が会員

外の方でした。このようなイベ

ントなどを通じて当会をPRする

ことが、新入会員の増加につな

る近道ではないでしょうか。

●当会だけでなく、至る所で高齢

化が叫ばれていますが、「実年齢」

だけを問題にするのは、もうやめ

にしませんか。サミュエル・ウル

マンの詩「青春(Youth)」を持ち出

すまでもなく、信念や自信、希望

を失ったとき、人は老いていくも

のです。山の人は気が若い人が多

いと思いますが、「山年齢」だけは

いつまでも若く。

(節田重彰)

日本山岳会会報 山 854号

2016年(平成28年)7月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 小林政志
 編集人 節田重彰
 Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社